

## 直説法半過去試論Ⅱ

—L'imparfait est-il un temps?—

(Si+直説法半過去)

日 高 佳

試論Ⅰ<sup>(1)</sup>において、主として非依存節に現われる直説法半過去（以後直説法を省略し半過去とする。）の種々の用法を見、その本質的機能をさぐって来たが、試論Ⅱにおいては、叙法（mode）としての意味あいの強い半過去といわれている Si+直説法半過去について、用例にあたりながらその機能がどこに由来するのか考えてみたい。

- (1) Si *j'avais* vingt ans de moins (maintenant), je vous accompagnerais.  
(G. Mauger: Grammaire pratique du français d'aujourd'hui. p. 250)  
(今、私が20年若かったら、あなたのお伴を致しますのに。)
- (2) Si *j'avais* mes notes avec moi, je serais plus à l'aise pour parler. (H. Sten: Les Temps du verbe. p. 79)  
(もし今ここにノートがあれば、お話しするのに楽なのですが。)
- (3) Si le diable en personne *venait* me le proposer, je lui dirais non. (H. Sten: ibid. p. 79)  
(もし悪魔の化身が私にそれをそのかしのやって来たら、私は嫌だとそれに云うでしょう。)
- (4) Si le temps le *permettait* (demain), je vous accompagnerais. (G. Mauger ibid. p. 249)  
(もし(明日)時間があれば、お伴出来ますのに。)
- (5) Si le temps le *permet* (demain), je vous accompagnerai.  
(明日、時間がとれたら、お伴致します。)

(1)―(4)は条件節 Si+半過去、帰結節条件法現在の文、(5)は条件節 Si+現在、帰結節直説法単純未来の文、いずれも表わす内容は仮定であり、規範文法の条件法の例文にはこれに類した文は多くみられる。規範文法ではこれらを「現在の事実と反する仮定を表わす文」と説明している。この仮定の内容をもう少し詳細にみてみよう。(1)と(2)は非現実を表わし、その事行が「現在時」に

関わりがある仮定、その内容は(1)は「ありそうもないこと」、(2)は「条件を整えばありえること」を表わしている。(3)(4)(5)は可能性を表わし、その事行が未来時に関わりがある仮定、その内容は(3)は「可能性零」、(4)は「可能性が少い」、(5)は「可能性が大きい」ということを表わしている。<sup>(2)</sup>

まず、(5)の例はさておき、(1)―(4)の例に現われる半過去は、「現在時」もしくは「未来時」に関わりを持つ事行を表わしている。試論 I で見て来た半過去はどの用法をとってみても表現する事行は「過去時」に属するものであった。「過去における現在」の用法でみた通り、事行は我々の眼前で進行中の様に見えるが、実際は我々の方が想像力によって過去の中に入って行き視点を過去に移すことによってその効果を得ているのであって、表現されている事行は紛れもなく「過去時」に属するものであった。「現在時」や「未来時」に関わる事行を表わすこの半過去の用法をどう考えたらよいであろうか。

H. Sten は次の様に考えている。

《現実とは「今私がここに居る」<sup>(3)</sup> という確実な領域である。非現実の事行はこの確実な領域から距離をおいて表現されなければならない。「現実を表現する」、つまり、この「今私がここに居る」という概念を表わすのに最も似わしい時称は直説法現在である。それ故、非現実を表わす為には他の時称の力を借りなければならない。古代ラテン語は、非現実を表わすのに接続法現在を使っていたが、古典ラテン語では、「非現実」と「潜在性」(可能性)を区別するようになり接続法半過去が用法に加わるようになった。こゝから現在に至る変遷には幾つかの過程があるが、「半過去・条件法」の体系が出来た。半過去は *moi-ici-maintenant-réel* の領域から逃れるのに効果的であり、条件法も又同じ役割を果たす。半過去が「非現実」を表わすか「可能性」を表わすかは文の前後関係 (*contexte*) によって決る。》<sup>(4)</sup> H. Sten は、*moi-ici-maintenant-réel* でない事行を表わすのは直説法現在以外の時称、その中では半過去が最適であると考えたが、その理由として、半過去のいわゆる「過去における現在」に属するいろいろな用法を説明した後でこれが最適であると結論している。試論 I でみてきた通り直説法現在と半過去は「時」(*époque*) の上で異なるがアスペクトの上では同一系列に入る。「時」をずらす事によって、現実感稀薄の印象がここから生み出されてくる。

G. Guillaume の動詞体系論<sup>(4)</sup> を批判し修正を加えられた川本茂雄氏の所説<sup>(6)</sup> はこの部分に関して一層すっきりとした考え方を示している。

まず G. Guillaume の動詞体系論を要約することから始めよう。

Guillaume は動詞が表わす事行の、既に実現された部分を  $\omega$  という *chronotype* これから実現されてゆく部分を  $\alpha$  という *chronotype* に区分して考える。「現在時」(*époque présente*) に生ずる事行を表わす動詞形は  $\omega + \alpha$  であり云いかえれば直説法現在である。Guillaume は動詞の示す事行の過程をこの様に分割して眺めるやり方を *vision sécante* と呼んでいる。「現在

時」を中心にして一方側に「未来時」反対側に「過去時」があるが、これらの時限では *chronotype* は  $\alpha$  か  $\omega$  どちらか一方だけとなる。Guillaume は *chronotype*  $\omega$  は事行の実現を絶え間なくどんどん進めていくもの、*chronotype*  $\alpha$  は事行の実現化を絶えず遅くらせ延ばしていくものと規定した上<sup>(7)</sup>で、「過去時」において、 $\omega$  は半過去をもたらし<sup>(8)</sup>、 $\alpha$  は単純過去を生んだ<sup>(9)</sup>としている。 $\omega$  に立つ半過去は、事行の実現化が進行中であり *vision sécante*  $\omega + \alpha$  を有する。<sup>(10)</sup>  $\alpha$  に立つ単純過去は、事行の実現化をどんどん延期中であるが、 $\alpha$  の点から過去をふりかえってみれば既に実現された部分のみが見え、こゝでは  $\omega$  は  $\alpha$  に重なってしまって  $\alpha$  のみとなり、一見区分のない *vue non sécante* となる。<sup>(11)</sup> 川本氏が修正を加えられたのはこの部分で、 $\alpha$  に下位区分  $\alpha^1$  と  $\alpha^2$  を設定されている。この下位区分の設定について川本氏は次の様に説明されている。

《 $\alpha$  は本来動詞の表示する過程の既実現の部分を捨象し、将実現の部分を示すものである。しかし、過去を振りかえる時には、そこに既実現のみが見出されるのである。しかもなお  $\alpha$  の相においてのみその過去過程を眺めようとするならば、Guillaume を論じた時に見てきたように、過程の始発点が終極点に近づくと従い、後方に生んでゆく  $\omega$  は次々に無視されてゆかねばならず、その結果は始発点が終極点と密着することになる。これに反し、現在時限と未来時限においては、 $\alpha$  は次々に未来に向って実現し展開されてゆく部分である。従って、そこに、同じ  $\alpha$  でありながら  $\alpha^1$  と  $\alpha^2$  とを区別することができるし、区別せざるを得なくなる。このことは、 $\omega + \alpha^1$  と  $\omega + \alpha^2$  との差違を直ちに解明することになる。 $\alpha^2$  は *présent* に含まれている  $\alpha^1$  とは異なるのである。それはこれから本当に実現し展開されてゆく  $\alpha$  ではない。したがって  $\omega + \alpha^2$  は *présent* と同じ *vision sécante* を有しながら、話者の現実との対面の仕方において距離が大なのである。》(弁別特質  $\alpha^1$ ,  $\alpha^2$ ,  $\omega$  の設定：フランス語学研究第1号、1967, pp. 9-10)

Guillaume の理論は直説法現在も半過去も *vision sécante*  $\omega + \alpha$  で表わされ、「現在時」、「過去時」の区別が示されていなかったが、川本修正論では  $\alpha$  に下位区分を設定することにより、 $\omega + \alpha^1$ ,  $\omega + \alpha^2$  の対立がはっきりとし、 $\alpha^2$  は「過去時」に属することを示す因子となり、各々の特性がより明確に表示される様になった。

次に「未来時」に関する Guillaume の見解を要約してみよう。

「未来時」はまだ実際には存在しない仮定の時限 (*période hypothétique*) であって、その仮定の内容を量で表わすとすれば、最大の仮定は H, 最少の仮定は h で示される。h を含む仮定の時限は *période catégorique* と名付けられ、「ありうる仮定」が行われる。H を含む時限は *futur hypothétique* と名付けられ、「実現が不確実な仮定」が為される。「未来時」において、 $h\alpha$  は *futur* をもたらし、 $H\omega$  は *conditionnel* を生み出す<sup>(12)</sup>。川本氏はこゝでも修正を加えられる。Guillaume は「未来時」に関しては、*vision* に言及していない。そこで川本氏は *futur*

と *conditionnel* の語形に注目し次の様な修正を加えられている。《形態的に見て *futur* の語形においても *conditionnel* の語形においても、動詞語幹の直後に音素  $\gamma$  が挿入されることに着目して、*futur* は *present* 語幹に  $\gamma$  を、*conditionnel* は *imparfait* 語幹に  $\gamma$  を添えるものだと解釈する。この  $\gamma$  は Guillaume 式に *hypothèse* を示す *morphème* といってよい。そして *minimum d'hypothèse* か *maximum d'hypothèse* かは、 $\gamma$  の後に来る  $\omega + \alpha^1$  と  $\omega + \alpha^2$  の差によって示されることが間もなく明らかになる。実際、*imparfait* と *conditionnel* は同じ語尾を有し、そのことが  $\omega + \alpha^2$  という共通要素を共にしていることによっても具体化されているといってよい。...」(弁別特質  $\alpha^1, \alpha^2, \omega$  の設定 p. 9)

川本氏の修正により対立のはっきりとしたこれらの時称についてその特性を *marqué(+)*–*non marqué(-)* で表にしてみると次の様になる。

	$\gamma$	$\omega$	$\alpha^1$	$\alpha^2$
<i>futur</i>	+	+	+	–
<i>présent</i>	–	+	+	–
<i>imparfait</i>	–	+	–	+
<i>passé simple</i>	–	–	–	+
<i>conditionnel présent</i>	+	+	–	+

$\alpha$  を  $\alpha^1$  と  $\alpha^2$  に下位区分したこと、 $\gamma$  を *hypothèse* を表わす形態素として加えたこと、これらが川本氏によって示された新しい見解であるが、この考え方は Guillaume の理論を進めたものといえる。同じく Guillaume の動詞論に論拠をおきながら、 $\alpha$  の下位区分に気づかなかった M. Wilmet は、《*imparfait*=*temps passé*+*aspect sécante*》<sup>13)</sup> というぎこちない表現をしている。*aspect sécante* は Guillaume のいう *vision sécante* から思いついた用語であるが、Guillaume の場合 *aspect* というのは動詞の形態上の事で単純形か複合形か複々合形かという事を意味する。M. Wilmet のいう *aspect sécante* は「 $\omega + \alpha$ 」を意味しているが、紛らわしい使い方である。Wilmet も川本氏と同じ考え方をしているのであるが、川本理論の方が一層すっきりしている。

(1)–(3)の例は、この川本理論にしたがえば、条件節  $\omega + \alpha^2$ 、帰結節  $\gamma + \omega + \alpha^2$  となり条件節、帰結節ともに  $\omega + \alpha^2$  を含みきれいな対称をなしている。「現在時」に関わる事行を  $\omega + \alpha^2$  によって示す事により現実感の稀薄さ「非現実」が表現されている。(5)の例では、条件節  $\omega + \alpha^1$ 、帰結節  $\gamma + \omega + \alpha^1$  となり、両節ともに  $\omega + \alpha^1$  を含む。又(5)は「未来時」に関わる事行を表わしているが、条件節では  $\gamma + \omega + \alpha^1$  が使われず、一つ時限をずらした  $\omega + \alpha^1$  が使用されている。(4)の例では、「未来時」に関することでありながら、条件節  $\omega + \alpha^2$ 、帰結節  $\gamma + \omega + \alpha^2$  が使われ、「非

現実」感は(5)に比べ一層強く表現されているが、この半過去の使い方はどう考えるべきであろうか。

Si で導かれる仮定文において、si の後に単純未来が使用される例は殆どない。つまり、 $Si + \gamma + \omega + \alpha^1$ ,  $\gamma + \omega + \alpha^1$  の組合せである。単純に考えれば、「未来時」の事を表わすのに未来を使用すれば「時」のずれは零、「そうなるに違いないと仮定される事実」を表わすことになる。<sup>(64)</sup>しかし単純未来は  $\gamma + \omega + \alpha^1$  であってこれ自体 minimum d'hypothèse を表わす。不確実な事しか表わせない  $\gamma + \omega + \alpha^1$  によって事実は示す事が出来ないとすれば「未来時」に関わる事であっても  $\gamma$  を除いた  $\omega + \alpha^1$  を使う以外にない。それ故「非現実」感の強くなるものには、「現在時」に関わる仮定の場合と同じ様に  $\omega + \alpha^2$ , つまり半過去を使うことになる。Si の後に未来形が使用される例について、H. Sten は「日常的な用法ではない」<sup>(65)</sup>といい、Damourette et Pichon は「話し言葉で『冗談』をいう場合に使用されているが、その正確な起源は知らない」と述べ、次の様な例をあげている。

Tu me croiras, si tu *voudras*.

(L. F. Céline. Voyage au bout de la nuit. p. 407)<sup>(66)</sup>

条件法の文の条件節と帰結節の「時」に関して、Guillaume は「≪仮定が先に示され、その結果 帰結がもたらされる。それ故 条件節の「時」は帰結節に先行する。条件節が現在なら帰結節は単純未来、条件節が半過去なら帰結節は条件法現在、条件節が大過去なら帰結節は条件法過去になる。≫<sup>(67)</sup>と説明している。(1)―(5)の例はすべて Guillaume のこの原則にあてはまる。しかし、この原則にあてはまらない例も多い。

(6) Si tu *as* envie de te rendre utile et de soulager les souffrances autrui, et bien, tu *as* ta mère. (Sartre: La Chambre, Le Mur. p. 55)

(もしもお前が役に立ちたい、だれかほかの人の苦しみを楽にしてあげたいと思うなら、お前にはお母様がいるよ。)

(7) S'il y *avait* quelque chose à faire, si on *pouvait* le sauver à force de soins, je ne *dis* pas. (Sartre: La Chambre, Le Mur p. 55)

(もしも何か打つべき手があるなら、手当をして彼を救うことが出来るなら、私は云いはしないよ。)

(6)―(7)の例は、治る見込みのない狂気の夫と暮す娘に対して離婚をすすめる父親の言葉である。別れる気のない娘に対して「もしもお前が～する気があるなら」、「もしも手段があるなら」と問う部分は「非現実」を表わす仮定節であるが、帰結節は「非現実」ではない。それ故、 $\gamma$  を持たない  $\omega + \alpha^1$ , つまり直説法現在が使用されている。

(8) Si j'avais eu des chefs et des armes, je *me battais* aussi bien que toi. Mais dis,

avec quoi que je me serais battu? (Sartre: La mort dans l'âme. p. 211)

(指導者がいて武器があったら、私だって君と同じ様に戦ったさ。何を手にして戦えばよかったのだろうか?)

この例では半過去 *je me battais* は原則的には条件法過去 *je me serais battu* となるべきであろう。次の行では、*je me serais battu* が使用されている。「武器があったら確実に戦った」という積極的意味を表わす為の半過去の使用である。これについて、H. Sten は「非現実感を薄めようとする為のもの、非現実から脱却しようとする為の半過去の使用である。」と述べている。<sup>108</sup>

帰結節での半過去使用の面白い例を Damourette et Pichon は《Les mots et la pensée》の中でいくつか挙げそれについて説明を加えている。

(9) Si j'avais eu deux points de plus, j'entrais à l'école de Lyon et *j'étais* médecin militaire à l'heure actuelle. (M. Maeterlinck; M. HD, le 13 novembre 1923. Damourette et Pichon. Tome V. p. 232)

(もう2点とっていたら、リヨン校に入って今は軍医になっていたでしょう。)

(10) S'il était resté, il *était* maintenant professeur à la Sorbonne. (ibid. le 22 février 1930. Damourette et Pichon. Tome V. p. 232)

(彼が残っていたら、今やソルボンヌの教授になっていたでしょう。)

Damourette et Pichon によれば、この用法は現代フランス語でよく見られ、《条件が満されていれば、今そうになっているにちがいない状態や事柄》を表わすのに使用されるという。<sup>109</sup> それ故、この半過去は「現在時」に関わりを持つ事行を示す半過去と考えられている。H. Sten はこれについて、《条件法過去を用いれば完全な非現実となるが半過去はその非現実からの逃避を表わしている。しかし、半過去の表わす事行は実現されていない。が、ほとんど実現されそうになったものとして表わし、「現在時」に関わりをもつ非現実を表わす。》<sup>110</sup> と考えている。

(6)–(10)は帰結節が必ずしも条件法をとらない例であったが、帰結節を省略してしまう場合もある。

(11) S'il *pouvait* mourir subitement! (Sartre: L'Enfance d'un chef, le Mur. p. 202)

(突然に彼が死んで呉れたらなあ。)

(12) Si tu *savais* comme je peux me l'imaginer. (Sartre: Le Mur. p. 22)

(私がその事をどんなによく想像出来るか君にわかって貰えたらなあ。)

もしそうであったら、「どんなによいだろう」という帰結節が省略され、条件節が願望や遺憾や命令などを表わすに至ったものと思われる。それ故、これも半過去が非現実を表わす一種と考えられる。

Si の後に半過去をとるものとして *comme si* に導かれる副詞節がある。これらの半過去も非現実を表わし、主節の動詞の「時」の支配は受けない。

- (13) puis, *comme s'il se rappelait* soudain quelque chose de très important qu'il fallait noter sur-le-champ, il prit un carnet dans sa poche. (Sartre: le Mur, p. 19)

(それから、すぐに書きとめておかねばならぬ何か大事なことでも急に思い出したかの様に、彼はポケットの中から手帖をとり出した。)

- (14) ...nous faisons *comme si* Henri *n'était pas là*. (Sartre: Intimité, Le Mur, p. 121)

(私たちは、まるでアンリがそこに居ないみたいなふりをして、振まったのよ。)

- (15) Il murmure, *comme s'il ne prenait pas garde à ses paroles*. (Sartre: Nausée p. 151)

(彼は、まるで自分の言葉に注意していないかの様に、つぶやいている。)

- (16) Pierre avait regardé devant lui avec étonnement *comme s'il voyait le mot*. (Sartre: La Chambre, Le Mur, p. 72)

(あたかも言葉を眺めているかの様に、ピエールは訝しげに前方を眺めていた。)

(13—(16)の例で主節の動詞の「時」が現在であろうと過去であろうと「あたかも～の如く」という表現を示す *comme si* の後には半過去のくる事がわかった。「あたかも～の如くであったかの様に」となると *comme si* の後には大過去がくる。

さて、ここまで *si* の後に来る半過去の用例をみて来た。これらの半過去を時称とみるか、叙法とみるか。《直説法半過去は時称であるか》という事が文法家の間で問題になって久しい。この事に言及した語学者は、L. Brun-Laroire,<sup>201</sup> A. Henri,<sup>202</sup> M. Regula,<sup>203</sup> M. Wilmet, R.-L. Wagner, H. Sten 等々枚挙に遑がない。mode としての意味あいの強い半過去の用例としては、まだこの他に非依存節で使われる *devoir*, *vouloir*, *falloir*, *pouvoir*, の用法、丁寧な云いまわしに使用される条件法に代る用法、*hypocoristique* な表現法など多くを残しているので早急な断言は許されないが、これらの半過去は叙法的用法ではあっても時称 (*temps*) であって叙法 (*mode*) ではない。条件法と共に *si* の後に使われる半過去は、すでに見て来た様に *moi-ici-maintenant-réel* から逃避する為に使われる半過去であって、その為には半過去が「過去時」を表わすという基本的性格が必要である。G. Guillaume の動詞体系においては条件法は時称であって叙法ではない。川本理論でも条件法は時称に入っている。これらは多くの語学者の間で議論の分かれるところであるが条件法が叙法でなければ半過去は叙法であるわけがない。ここまで断定しないまでも R.-L. Wagner は、《半過去はまさしく過去を示す時称であって、その用法が半過去の基本的機能によって説明の出来ないものはない。(但し、未来の事行に関わりのある補足節のごく二義的な用法の例を除く)》<sup>204</sup> と書いている。H. Sten も、M. Wilmet もこの R.-L.

Wagner の主張に同意している。<sup>24</sup> さて、試論Ⅱの結論となるが、叙法的用法の半過去のうち、Si+半過去の用例についてのみ見て来たが、この用法も又、半過去の未完了のアスペクト、つまり  $\omega + \alpha^2$  の性質から派生して来たものであるとみることができる。これで一先ず《試論Ⅱ》を終ることにしたい。

## 註

- (1) 日高佳：直説法半過去試論Ⅰ 東洋女子短期大学紀要 n°13 1981  
 (2) この分類は R-L, Wagner: Les phrases hypothétique commencement par «si» dans la langue française des origines à la fin du XVI<sup>e</sup> siècle. Droz 1939, pp. 48-49 によっている。  
 (3) 《moi ici maintenant réel》  
 (4) H, Sten: Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne. København 1964. pp. 81-82, pp. 137-138.

《Comment se fait il qu'on emploie un «tense» passé pour indiquer des actions qui seraient ou présentes ou futures? Il paraît facile de répondre: il faut écarter ces actions du monde des «réalités», de la sphère du moi ici-maintenant. On sait que le présente se prête très bien à cette conception... On doit donc recourir à d'autres temps pour ce qu'on appelle «irréel»... En latin archaïque on s'est servi du présent du subjonctif pour examiner l'irréel... en latin classique on a renchéri sur l'idée en introduisant l'imparfait du subjonctif (il paraît qu'il fallait distinguer aussi entre irréel et potentiel)... Mais pour nous en tenir aux types traités ici, il y a donc les deux temps du passé: imparfait et conditionnel... L'imparfait sert à effectuer l'évasion de la sphère moi-ici maintenant réel catégorique. Le conditionnel peut rendre le même service... L'imparfait peut être «irréel» ou «potentiel», c'est-à-dire que c'est plutôt le contexte qui décide...》

- (5) G. Guillaume: Temps et Verbe. Théorie des aspects, des modes et des temps. 1965.  
 (6) 川本茂雄: 弁別特質  $\alpha^1, \alpha^2, \omega$  の設定 フランス語学研究第1号. pp. 1-13 1967.  
     「弁別特質  $\alpha^1, \alpha^2, \omega$  の設定」追記 フランス語学研究第2号 pp. 45-46 1968.  
 (7) G. Guillaume: Temps et Verbe p. 61.

1. De déterminer le chronotype  $\omega$  comme forme qui opère continument sa réalisation.
2. De déterminer le chronotype  $\alpha$  comme forme qui diffère continument sa réalisation.

- (8) G. Guillaume: *ibid.* p. 61.

1. Véhiculée dans le passé sur chronotype  $\omega$ , l'image verbale est une image qui, d'instant en instant, opère sa réalisation, de sorte que, en quelque point de son déroulement qu'on la considère, elle se divise en deux parties, l'une déjà accomplie qui figure dans la perspective réalité et l'autre inaccompli qui figure dans la perspective devenir.

Cette vision sécante de l'image verbale est exprimée dans la langue française par la forme *d'imparfait*...

- (9) G. Guillaume: *ibid.* pp. 61-62.

Véhiculée dans le passé sur chronotype  $\alpha$  l'image verbale est une image qui, d'instant en instant diffère sa réalisation usque ad finem, et s'il y a lieu ad infinitum, de sorte qu'en aucun point de son déroulement, elle ne peut opposer une partie déjà accomplie d'elle-même à une



partie non encore accomplie.

Cette indivision des deux perspectives réalité et devenir, qui implique une vue non sécante de l'image verbale, est exprimé dans la langue par la forme de *parfait défini*.

(10) 註(8)参照

(11) 註(9)参照

(12) G. Guillaume: *ibid.* pp. 54-55.

La première chose à considérer dans la théorie du futur, c'est qu'il s'agit d'une époque faite de temps qui n'a pas encore existé réellement... Nous nommerons cette période, la période hypothétique, et la représentation par un intervalle H—h, H étant un maximum d'hypothèse et h un minimum...

Le minimum d'hypothèse h marque le moment où le futur, parfaitement déterminé dans l'esprit comme tel, se sépare du présent. Sa position coïncide par conséquent avec la limite  $\alpha$  qui marque la sortie du présent et l'entrée dans le futur.

Quant au maximum d'hypothèse H, il marque le moment où le futur, trop indéterminé comme tel pour pouvoir se distinguer du présent (de la partie futur du présent et, partant, du présent dans son ensemble, car sans sa partie future, le présent n'existe pas) entre en opposition directe avec le passé. Sa position coïncide, par conséquent, avec la limite  $\omega$ , qui marque la sortie du présent et l'entrée dans le passé.

(13) M. Wilmet: Etude de morpho-syntaxe verbale Klincksieck 1976. p. 93, p. 94.

«Le présent et l'imparfait ont des propriétés aspectuelles communes: laissant dans l'ombre les limites de l'événement verbal, ils le traduisent en «perspective sécante»... Imparfait = Temps passé + Aspect sécante»

(14) 清水茂光: “副詞化辞 si” の節内に用いられる未来形と条件法 フランス語学研究第11号, 1977, p. 30.

(15) H. Sten: Les Temps du Verbe fini (indicatif). p. 66.

On sait que les conditionnelles introduites par si n'admettent pas le futur. On devrait peut-être dire «pas habituellement»... 例文として次を挙げている

(i) Si tu seras éternel, tu seras donc mortel. (Valéry)

(ii) Qui donc attendons-nous, s'ils ne reviendront pas? (V. Hugo)

(16) Damourette et Picchon: Les mots et la Pensée. Tome V. p. 402.

(17) G. Guillaume: Temps et Verbe. p. 75.

(18) H. Sten: Les Temps du Verbe fini (indicatif), pp. 143-144.

(19) Damourette et Pichon: Les mots et la Pensée Tome V. p. 229. p. 232.

(20) H. Sten: Temps et Verbe p. 142.

(21) L. Brun-Laroire: L'imparfait de l'indicatif est-il un tens? *Revue de Philologie Française et de Littérature*, 41, 1929, pp. 56-86.

(22) A. Henri: L'imparfait est-il un temps? *Mélanges ch. Bruneau*, Genève, 1954, pp. 11-17.

(23) M. Regula: Les fonctions de l'imparfait. *Zeitschrift für Romanische Philologie*, 74, 1958. pp. 251-259.

(24) R-L. Wagner: Les phrases hypothétiques commencement par «si» dans la langue française des origines à la fin du XVI<sup>e</sup>. Droz 1939, p. 328.

«Pour nous, il n'est pas d'imparfait (exception faite du cas très secondaire de celui des complétives impliquant un fait à venir) figurant dans une phrase, dont on ne puisse expliquer l'emploi par sa valeur originelle qui est de traduire une portion du passé»

(25) H. Sten: Les Temps du verbe. p. 129.

M. Wilmet: Etudes de Morpho-Syntaxe verbale. p. 94.

Texte:

J.-P. Sartre: La Nausée. Gallimard. 1954.

J.-P. Sartre: Le Mur. Gallimard. 1961.

J.-P. Sartre: La Mort dans l'âme. Gallimard. 1961.